



2005,4,27

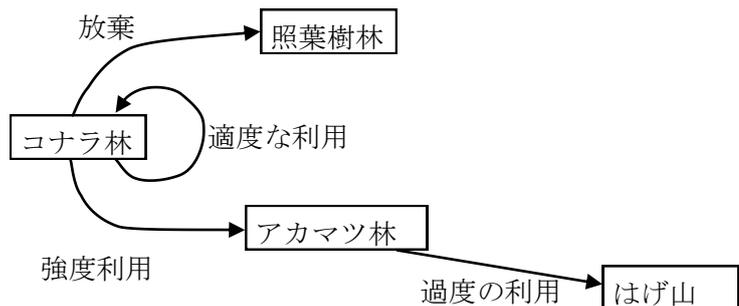
龍谷大学瀬田キャンパスから南の方角を望んだ景色



近畿地域の低山帯では、潜在自然植生は照葉樹林である。古くから保護されてきた神社の森などでは、照葉樹の林を見ることができ、里山として利用されていた場所では、コナラが優占した林であることが多い。これらの林も、人の関わりがない状態で十分な時間が経過すると、シイやカシなどが優占する照葉樹林に遷移していく。

人の関わりが適度に継続されているとコナラ林は持続的に利用することができる。強度な利用が行われた場合、地力が減退し、アカマツ林に推移していく。さらに過度の利用が行われると、草原やはげ山に変化していく。

コナラは古くから人の生活と密接な関係を持ってきた。薪や炭としての利用されたし、シイタケのほだ木



に利用されてきた。また、地面にたまった落ち葉を掻き集めてきて、肥料やたき付けとして利用した。関東地方では、落ち葉を堆積し、落ち葉の発酵熱を利用してサツマイモの苗作りを行ったらしい。

コナラの木はを切り倒すと、伐り株から芽が出て、やがて大きなコナラの木に育つ。伐り株から出る芽のことを^{ぼうが}萌芽という。萌芽によって森林を再生させることを萌芽更新という。コナラの他にも萌芽更新する樹種は多く存在する。森林を切り倒して更新してきた萌芽のなかから、コナラを残して育てることにより、コナラ林が維持されてきた。

コナラはドングリの木としてもよく知られている。萌芽での更新だけでなく、ドングリからの芽生えが大きく育ってコナラ林が再生することもある。森林が伐採された場合も、萌芽更新のみでなくドングリによる更新（実生更新）もある程度は起こっているようである。

秋にたくさんのドングリが落下し、すぐに根を伸ばして、春までじっと待っている。春になると実生の地上部分に葉が展開し、コナラ林の地面にはたくさんのコナラの稚樹が生い茂る。上層の大きなコナラの葉が茂ってくると、地面まで届く光はわずか1~2%程度にまで減少してしまう。そのため、せっかく葉を展開したコナラの稚樹のほとんどが枯死してしまう。



ブナ科の樹木の種子はドングリと呼ばれる。滋賀県の平地~山地で見られるドングリは、コナラ、クリ、クヌギ、アベマキ、アラカシ、シラカシ、アカガシ、ツクバネガシ、ウラジロガシ、マテバシイ、ツブラジイ（コジイ）、スダジイ（イタジイ）などである。標高の高いところではイヌブナやブナも見られる。大小さまざまであるが、いずれもドングリをつくる。

ドングリは人間の食料として古くから利用されてきた。基本的にはどのドングリも食べられるが、アクの強いものもあり、アクを抜くための色々な方法が考え出されている。ここに名前をあげた樹木の中では、クリ、ツブラジイ、スダジイ、ブナなどのドングリはアクがほとんどないので、生のままでも食べられる。あるいは焼いたり煎ったりすることでおいしく食べられる。マテバシイは比較的アクの少ないドングリであり、茹でたり煎ったりすれば食べることができる。コナラやアラカシ、シラカシなどのドングリはアクが強く、そのままでは渋くて食べられない。何度も茹でこぼし、灰汁を使ってアク抜きをすることで、食べられるようになる。また、実をすりつぶして水にさらし、デンプンを沈殿させて食料にする方法も行われてきた。高知県にはカシ豆腐という食物があるが、これはアラカシのドングリから採取したデンプンを原料にしている。

－アカマツ－

マツ属の樹木（世界に約100種、日本に7種）

日本のマツ属

二葉松 クロマツ、アカマツ、リュウキュウマツ

五葉松 ハイマツ、ゴヨウマツ（ヒメコマツ）、チョウセンゴヨウ、ヤクタネゴヨウ

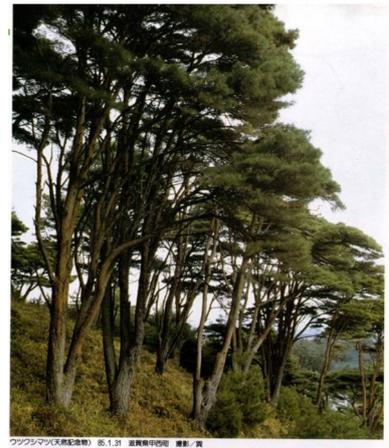
世界のマツ属

一葉松 アメリカヒトツバマツ

二葉松 ヨーロッパアカマツ、ヨーロッパクロマツ、コントルタマツなど

三葉松 ラジアータマツ、ポンデローサマツ、ジェフリーマツ、ダイオウショウなど

五葉松 ストローブマツ、マケドニアマツなど



クロマツ、アカマツ、ウツクシマツ（アカマツの品種） 「日本の樹木」山と溪谷社より



アカマツは、攪乱地にいち早く出現する樹木である。龍谷大学瀬田学舎の周辺に生えているアカマツは、植栽したものではなく、学舎造成時に裸地化した法面に種子が落ち、芽生えから育ったものである。1989年に瀬田学舎が開設されたので、その時に芽生えたアカマツは約20年生である。アカマツは、枝階を形成する性質がある。同じ年齢の枝が1箇所から分岐しているのを枝階という。幹の枝階の数を調べれば、その木の年齢を知ることができる。瀬田学舎周辺のアカマツには約20の枝階があるはずである。

アカマツの根に共生するキノコがマツタケである。比較的若いアカマツ林に多くのマツタケが出る傾向にある。マツタケの菌は他の菌類との競争には弱いようである。共生相手であるアカマツも、他の種との競争には弱いようである。土壌が肥えてくると他の植物が育ってきて、アカマツは衰退していく。

日本の古代にはアカマツはごく限られた場所のみ分布していたようである。魏志倭人伝にもアカマツの名は記載されていないし、発掘された木製品もアカマツ製のもののみはみられない。人々の活動が活発になるにつれ、アカマツが分布を拡げはじめたようである。

アカマツの材には樹脂成分が多く含まれ、そのために製塩や陶器作りの燃料として重宝された。曲げに強いために、梁材としてなくてはならないものであった。現在は入手が困難なために、外国産のマツ材が梁として使われている。

—その他—



タヌキのタメフンから芽生えたカキノキ。2005,6,18



ウワミズザクラの芽生え。2006,3,23



2007,4,2

コバノミツバツツジ
林床に繁茂した低木類を刈り払うことにより、開花が促進された。

2006,4,22



食べ頃のタ
カノツメの
若葉

2006,4,17



食べ頃のコ
シアブラの
若葉

2006,4,18



イワナシ
4月下旬～5月上旬に葉の陰
に美味しい実ができる。

2008,3,25